『食道楽続編　春の巻』にみる明治期の日本語の文字・語彙の表現特徴

A Study on the Characteristics of Japanese Character and Vocabulary Seen in the *Kuidoraku sequel/ book of spring* in the Meiji Era

王崗・劉可蒙
深圳大学

要旨

明治時代は、日本の政治、社会、文化、科学などほぼ全てにおいて激しく揺れ動いた重大な歴史的な転換期であった。この激動期における日本語も、模索的・流動的であり、現代語の確立に至るまでに多くの「ゆれ」や「変化」がみられた（今野 2012 参照）。中では、文字表現や語彙の表記などのバリエーションも際立っていた。例えば、「煮汁（だし）」と「煑汁（だし）」という同語異字体、「蓮根」と「蓮根（はす）（れんこん）」にみる振り仮名の相違、「ジャガイモ」を指すのに「馬鈴薯」「じゃがいも」「ジヤガ芋」「ポテト」「ポテツト」と合わせて 5 つほどの表現があった、というようなケースが当時において普通に存在していた。明治期にみられるそういった文字・語彙の表現特徴について、本稿では、当時の大衆小説でしかもベストセラー小説でもある『食道楽続編　春の巻』（村井 1903-1913、報知社）をもとに検討する。

キーワード:
文字・語彙、表記、ルビ、特徴、ゆれ

『食道楽続編　春の巻』にみる明治期の日本語の文字・語彙の表現特徴

王崗・劉可蒙
深圳大学

１．はじめに

明治時代は、様々な意味で、激動していた時代であると思われる。積極的な西洋文明の移入により、政治、経済、社会思想などほぼあらゆる面において、近代化が激しく押し進められていた。その劇的な変革の過程においては、外来の物事、新しい物事が次から次へと生まれていった。そして、それらの物事を表すために、斬新な語形を作り出したり、既存の語やその組み合わせを新しい意味で用いたりするという言語的な工夫や方法が当時の人々に考案され、実践された。それによって、新しい語彙が大量に作られ、一つの語彙に対して全く同じ意味で複数の表記が用いられるといった事象が生じてきた。つまり、語彙が飛躍的に増えたものの、その表記や表現などの周辺的なバリエーションがもたらされたということである。

本稿では、明治期における日本語の文字・語彙の分野に生起した比較的激しい変化や表現上の特徴について、『食道楽続編　春の巻』（村井1903-1913、報知社）[1]における語例を手がかりとして考察する[2]。

２.『食道楽続編　春の巻』と著者の村井弦斎

『食道楽続編　春の巻』を含む『食道楽』シリーズ小説は、明治・大正時代のジャーナリスト、小説家である村井弦斎（1863-1927）によって著された[3]。

村井は、1863年豊橋に生まれ、11歳からロシア語を学び、20歳で渡米、米国で約1年を過ごした。帰国後、『郵便報知新聞』（その後、『報知新聞』と改名）を発行する報知社に入社した。『経国美談』の著者と

1　当該小説へのアクセス：国立国会図書館デジタルコレクション (https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/886113)。

2　本研究は、劉可蒙（2020）による未公刊修士論文『近代日本語にみられる文字表記のゆれー
『食道楽』の料理用語を中心に―』の一部を加筆、拡充したものである。

3　村井弦斎及び『食道楽続編　春の巻』などについては次のサイトや文献に詳しい。
1)http://www.muraigensai.com/gensaimaturi/gensai.html,
2)https://ja.wikipedia.org/wiki/食道楽_(村井弦斎),
3)https://ja.wikipedia.org/wiki/村井弦斎,
4)黒岩比佐子（2004）『「食道楽」の人 村井弦斎』、岩波書店。

して知られる当時社長だった矢野龍溪の勧めで、小説を執筆するようになった。1901 年からは『百道楽』というシリーズで、『釣道楽』『酒道楽』『女道楽』『食道楽』『食道楽続篇』という 5 篇の「道楽小説」を執筆したが、その中で最も話題を呼び、単行本が大ベストセラーになり、村井の代表作とされているのが『食道楽』シリーズであった。このシリーズは、1903 年より『報知新聞』に連載され、連載中順次単行本としてまとめられ、報知社から刊行された。全シリーズは、正編 4 巻と続編 4 巻（それぞれ〈春の巻〉〈夏の巻〉〈秋の巻〉〈冬の巻〉からなる）で構成される。

『食道楽』シリーズは、「大原さん」と「お登和さん」の恋愛を軸に、日常生活のいたるところで、料理や家事について語りつつ、物語を展開していく作品である。四季の食材を生かした料理が続々登場する「レシピ本」でもある。料理方法が詳しく語られるだけでなく、目次には料理の名前が書いてあり、注釈にも補足説明があり、巻末には食品成分一覧や価格表が載るなど、とても実用的な書籍といえる。そして、料理法だけではなく、食材の選び方、台所のデザイン、衛生、栄養、女性地位の向上や男性の家事への積極的な参加など、現代に通じる新しい家庭像も見せていた。このように、『食道楽』シリーズはまさに当時の日本人の食生活を取り扱いながら、食をテーマにした文学作品としてベストセラーになった。

長きにわたって新聞に掲載された小説ということで、多数の読者に目を向けたために、『食道楽』シリーズは内容が通俗的で、平易な表現を使用しているのが特徴である。また、『食道楽』シリーズのような新聞小説は、広範な読者層が対象である読み物といえ、明治の社会を代表する言語資料としてふさわしいし、世の中の言葉の変化を最も敏感に反映しているものとも思われる。この意味で、『食道楽』シリーズは、本稿にとって格好の研究資料になる。ただし、国立国会図書館デジタルコレクションにより公開されている『食道楽』シリーズの中では、正確に読み取れない部分が多かったため、本稿では『食道楽続編　春の巻』のみを対象とした。なお、採録にあたり資料の元となる表記及び体裁を尊重する立場をとり、仮名遣い、字体などは、基本的に原文のままとする。

３．明治期文章の総ルビ表記の言語特徴

すべての漢字に読み方を付けるという総ルビの表記法は、現代日本語の文章には特例以外にほとんど姿を消してしまうのだが、明治期発行の新聞（『国民新聞』『読売新聞』など）、小説（『当世書生気質』『破戒』など）においては一般的であったように思われる。『食道楽続編　春の巻』にも同様の表現法が確認できる。以下のようである(引用ページがプリントされた当小説による。以下同様）。

（1）追々園藝の開ける(おひ／＼ゑんげい ひら)に連(つ)れて色々(いろ く)の西洋野菜(せいやう や さい)や市場(し ぢやう)へ出(で)て来(き)ますが食べ方(た かた)を知(し)らないとその味(あぢ)を賞(しよう)する事(こと)が出来(で き)ません（p.299）

このようなスタイルの文章は、現代の読み手は多少とも不思議がるかもしれないが、明治期の人々には普通なものだっただろう。では、当時にはなぜそういう表記法が取り入れられたのだろうか。次のようないくつかの要因が考えられる。

一つは、文明開化と呼ばれる時代的な変化によるものである。長期にわたる鎖国を解いて開国した明治政府は、西洋文明の諸成果を取り入れつつ、政治、経済、社会の近代化を推進していた。その過程においては新しい概念や物事が生み出されたわけだが、そうした概念や物事を言い表すためには新しい言葉が必要になった。そこで、当時の日本人は、借用や新造などの方法で数多くの新語を作り上げ、それに対応しようとしていた。しかし、新語のため、世間に広く認知されていないものが多かったことが容易に想像される。よって、当時の新聞や小説には、『食道楽続編　春の巻』の読者も含め、より多くの人に本文を読ませるために、新語も含め、多くの言葉にルビが振られるということになったのだと思われる。

もう一つは、明治期の言文一致運動に関係している。江戸期に至るまでの長い期間、知識階級の用いる書記言語は、一般の人々には理解困難な語彙や文体を用いていたことに加えて、いわゆる音声言語と書記言語の乖離にも大きいものがあった（今仲 2021）。そして、その差を解消するために、言文一致運動が明治政府や知識人を中心に推進され、更に社会一般に広がった。この運動に呼応するがごとく、書き言葉（書記言語）において、明治前期まで続いてきた「漢文体」や「漢文直訳体」という文体にかわって、

言文一致体が試みられるようになった。「そしてそれらの文体の文章を表記するために、漢字・片仮名・平仮名が用いられ、漢字には振り仮名を付けることが行われた」（飛田 1973：82)。『食道楽続編　春の巻』における総ルビ表記はまさにその一つの実践例にあたる。

最後に、庶民たちの識字率の低下によるところもある。飛田（1973：82)では、「明治初期においては、漢字をよめる人は知識人にかぎられ、片仮名もそれに近い状態であった」と指摘したうえ、「士族以外は、わずかに、寺小屋にかよった人々が、平仮名をよむことができたにすぎない。（略）したがって、平仮名が読める人を対象とした文章は、総ルビで漢字平仮名交り文が普通であった」としている。広範な読者層を擁する新聞小説『食道楽続編　春の巻』となると、更にその幅を広げて、片仮名も加えて、結局総ルビでの漢字仮名交じり文という文章表記の形が取り入れられていた。このように、明治期には、漢字や片仮名の読めない人がまだ多かったため、より多くの読者たちに文章を容易に理解させるために総ルビが導入されたのである。

４．明治期の同語異表記の言語特徴

4.1 字体の違うケース

字体は、文字を見分け、何という文字であるかを判別する際の基準として社会的に共有されている抽象的な概念であり、手書き文字であるか印刷文字であるかにもかかわらず、様々な字形として具現化される。字体が一つの抽象的な概念であるとしても、具現化される字形には、長短、筆画、部首、繁簡といった相違が現れると言われている。

劇的な変化をしていた明治時代には、字体、字形を含め、多様な文字表現があった。まったく同一語なのに異なる字体・語形がなされるということはその一つである。『食道楽続編　春の巻』の調査でも、同様の事情が確認できた。まず、例をあげよう（下線は本稿による強調。以下同様）。

（2）此中へ椎茸、人参、スダレ麩、油揚、糸蒟蒻、干瓢、紅生姜なんぞを入れます（p.224）

（3）油揚を二枚に裂いてゆでた蕗を三四本づゝ巻き込んで中央を干瓢で括ります（p.304）

（4）　例の通り酒を注して鰹節の煮汁と醤油と砂糖で味を付けて煑たのです（p.246）

（5）　是れは昆布の煑汁で炊きました、先刻御覧になつた様に昆布を煑出してその汁で炊きますと（p.253）

（2）と（3）における「干瓢・干飄」は、同じくユウガオの果実を乾燥させた食品を指しており、（4）と（5）における「煮汁・煑汁」はいずれも出し汁のことを指す。しかし、各組内の漢字の字体差も明白である。（2）の「瓢」は瓢箪のことであり、（3）の「飄」は「漂う」の意味合いを持つものであるが、『食道楽続編　春の巻』には「干」と組んで同一のものを指すのに用いられた。一方、（5）における「煑」は（4）における「煮」の異体字であり、「煮」とともに食べ物を煮るという意味を表すが、いずれも「汁」を後接させて「出し汁」の意として使用された。現代日本語には、「瓢」でも「煮」でもまだ目にすることができるが、ほかの2語はいずれも姿が消えてしまった。とはいえ、上例のように、同一語に対して、全く同じ意味でしかも同じ文章に複数の字体が用いられたのが、明治期の文字使用の一つの特徴だといえよう。

明治時代に同語異字体の書き方が現れたのは、統一的な言語規範がまだ整っていなかったという大きな要因が考えられる。時代が変わったものの、それに応じる言語的な規範や標準が定まっていなかったため、古代語と近代語、在来語と外来語、旧字体と新字体、正字と異体字などが入り交じりながら使用されていたように思われる。その過程において字体や字形のゆれが生じてしまったのであろう。

明治時代における語の表記（字体）の移行や定着について、間淵（2016）には興味深い調査があった。そこからも、明治時代語の字体の交替と移行の時期などが少しわかるため、以下のようにその一部を整理・引用する。

表１　標準字体の定着時期判定例（ゴシック体は標準字体）

時期（年）／頻度（例）／語例	1874	1887	1895	1901	1909	1917	1925
工夫	6	26	69	57	72	32	77
工風	2	3	23	13	7	12	3
希望	2	205	196	257	369	303	237
冀望	8	11	9	31		2	1
構造	1	19	42	131	68	26	79
搆造	2	14	77	30			
記念		4	10	3	16	74	106
紀念		10	88	84	115		2
記憶	1	10	14	13	86	102	105
記臆	4	62	70	60	10		
十分	21	74	196	341	325	356	219
充分	1	137	206	293	175	172	217
区画	3	20	8	13			
区劃		4	17	16	21	17	11

（注：当論文の p.266 より整理）

表からわかるように、漢語の字体は、明治期においてゆれていたものがあったが、時代の発展につれて、標準字体、すなわち現代語的な字体に徐々に移行、統合されるようになった場合もある。ただし、異字体から標準字体への転換は、一直線ではなく、相互に競合、上下しながら、行われていたようにみえる。その中では、「十分」と「充分」のように今日までででも字体が拮抗してまだ定着していないものもあれば、「区画」と「区劃」

のように一時的に異字体が優位だが、現代語にはすでに衰退、消失したものもある。要するに、明治時代において、漢語、漢字の字体に不安定な一面があったことは、普通な現象だったといえよう。

4.2 ルビの違うケース

『食道楽続編　春の巻』の文章には総ルビ表記が採用されているが、同様の語に異なるルビが振られるということが、当小説の調査で明らかにできた。以下、ルビの相違が語の意味に対応するものと、そうではないものとに分けて検討を進める。

4.2.1 意味対応の例

『食道楽続編　春の巻』の各語を調べたところ、同一語でありながら、ルビの相違によってその意味内容がそれぞれ決まる、ということが明らかになった。例を下記に示す。

（6）宅(たく)ではよく牛(うし)や鳥(とり)或(ぶた)は豚(ぶた)のロースが残(のこ)ります（p.248）

（7）蕪(かぶ)を鹽湯(しほゆ)でゆでゝ鳥(とり)か牛(ぎう)のスープで煮(に)込(こ)んで醤油(しやうゆ)で味(あぢ)をつけても結構(けつかう)です（p.315）

（8）尤(もつと)も相模邊(さがみへん)の海(うみ)でも甘鯛(あまだひ)は澤山(たくさんと)取(あぢ)れて味(あぢ)も中々(なか〳〵)宜(よろ)しうございますからあの魚(さかな)を用(もち)ゐたら美味(おいし)い物(もの)の出来(でき)ない事(こと)はありませんがあれには海(うみ)から取(と)りたての極(ご)く新鮮(しんせん)な魚(うを)を使(つか)はなければいけません（p.120）

（6）と（7）の「牛」に振られたルビは「うし」と「ぎう」（ぎゅう）という 2 つのバージョンがあるが、「うし」は「牛」の訓読みになり、「ぎう」はその音読みになる。現代日本語では、「牛」は、訓読みの場合に基本的に家畜牛を指す[4]が、音読みの場合に主に「牛の肉」（『明鏡国語辞典　携帯版』p.408）[5]を表す。（6）では「牛」が「ロース」の限定成分になり、その「ロース」が牛・豚などの肩から腰にかけての背肉の部分を指すため、ここの「牛」は家畜（食用）の牛のことだと推定できる。

4　『広辞林（第六版）』三省堂編修所編、三省堂、1983、p.164 参照。

4 『明鏡国語辞典　携帯版』北原保雄編、大修館書店、2003。

一方の（7）には「牛のスープ」という表現があり、ここの「牛」はスープに使われている食材のことであるため、牛肉などのことを言い表すと推定できる。このように、『食道楽続編　春の巻』においては、訓読みのルビなら家畜牛、音読みなら牛肉というように、ルビの振り方によって、それぞれの語の意味を限定する表現法があった。

（6）と（7）に比べれば、（8）の様子が少し違う。なぜなら、（8）の「魚」に振られたルビは、いずれも訓読みだからである。しかし、（8）でもルビと語意との関連性が読み取れる。当該文脈によると、「さかな」と表記された「魚」は相模邊の海で取られた、料理用の甘鯛のことを指しており、「うを」（うお）と表記されたのは特定なしの新鮮な魚類のことだと判明できる。『明鏡国語辞典　携帯版』（大修館書店、2003）では、「うお」は「魚類の総称」（p.144）としており、「さかな」の語源として「「酒菜」の意。多く魚肉を酒の肴としたことから」（p.629）とも解説している。この記述が「さかな」と「うお」の微妙な語意差を示してくれる。つまり、主に料理用または「酒菜」用の「魚」は、「さかな」というのが普通なようだが、広義的な魚類の場合は「うお」というのが可能である。ここから推論すれば、（8）におけるルビの振り分けが、ちょうどその語意差に対応してなされたのだということがいえるだろう。

ちなみに、『食道楽続編　春の巻』において、「魚」という語が合わせて 48 回出ているが、そのルビの配分をまとめると、以下のとおりである。

表 2　「魚」のルビ別頻度と比率

ルビ／頻度	さかな	うを
魚	44(91.7%)	4(8.3%)

表 2 によると、「さかな」と表記されたのは、44 回にのぼり、全体の 91.7%も占めており、断トツトップである。一方の「うを」は、たった 4 回で 8.3%の使用率にすぎない。これほど差が出たのには理由がある。すでに紹介したように、『食道楽続編　春の巻』はいわゆる料理小説であるため、魚の調理法などにまつわる話が当然多い。これに伴って、「魚」のルビとして料理用の「さかな」と振られたことも多くなったのである。

つまるところ、『食道楽続編　春の巻』におけるルビの表記は、同一語彙に対して、そのニュアンスや語意の相違に応じて仕分けられたことがあると、ここまでの考察で明らかにできた。

4.2.2 意味対応のない例

『食道楽続編　春の巻』における各同一語のルビを詳しく見比べると、ルビのつけ方と該当語の意味との間に関連性がほとんど感じ取れないケースも多数ある。次に例をあげる。

（9）　蓮根(はす)を白(しろ)ゆでにして暫(しばら)く酢(す)をかけて置(お)きます（p.32）
（10）　木曽川(きそがは)と揖斐川(いびがは)の中間(ちうかん)は日本(にほんいち)一と云(い)ふ位(くらゐ)な蓮根(れんこん)の出来(でき)る處(ところ)です（p.107）
（11）　是(こ)れもサラダ油(あぶら)で揚(あ)げますから屹度(きつと)世間(せけん)に流行(はや)りますよ（p.30）
（12）　田舎(ゐなか)なぞでは迚(とて)もサラダ油(ゆ)だの西洋酢(せいやうず)だのを自由(じいう)に使(つか)ふ事(こと)が出来(で)ません（p.141）

上記（9）と（10）における「蓮根」に振られたルビは、それぞれ「はす」と「れんこん」である。しかし、「はす」（蓮）と「れんこん」（蓮根）は、文字どおり、別物だといってよい。これは、立山（2020）による、「れんこんとはハスの地下茎が肥大化した部分である。ハス（英 lotus）とは、水生植物、多年生草本で、食用ハス（：地下茎の肥大性が強い作物として利用しているれんこん）と花バス（flowering lotus）（：肥大性は弱いが花の部位が観賞的に特色を示す）に大きく区分される」（p.9）という記述からもはっきりしてくる。

（9）では「蓮根(はす)を白ゆでにして…酢をかけて」という表現があるため、ここの「はす」が「蓮」の食べる部分、すなわち本物の蓮根を指しているということが推察できる。一方の（10）では、「木曽川と揖斐川の中間は…蓮根(れんこん)の出来る處です」と食材の産地を示す表現があるため、ここの「れんこん」が「ハスの地下茎が肥大化した部分である」蓮根を指すことが判明できる。ということは、明治時期の人々にとって、植物としての「蓮」と食材としての「蓮根」の違いはまさか知らなかっかということだろうか。実際は、必ずしもそうではなかったと思われる。以下の説がその謎解きの参考になる。

塩田（2005）には、「はす」と「れんこん」について興味深い解説があるので、次のように引用する。

> 「はす（蓮）のことを日本各地でどう呼ぶか、ということについて見てみると、「植物」としての呼び名が「はす」、「地下茎（食べる部分）」が「れんこん」、という使い分けをしている地域が多いようです。ただし東京では、「はす」ということばで「植物」だけでなく「地下茎」のことも指し示してきた習慣があると言われています。これは、「東京の方言（的なことばの使い方）」の１つだと言えるでしょう。
>
> 「はす」と「れんこん」について、NHK 放送文化研究所ではウェブ上でアンケートをしてみました（2005 年 9 月実施、2075 人回答）。その結果、地下茎の部分については「れんこん」という言い方しか聞いたことがないし、自分も「れんこん」としか言わない、という答えが、関東と甲信越地方に際だって少なかったのです。つまり、関東・甲信越地方ではそれだけ「はす」ということばを見聞きして自分でも使う人が多い、ということになります。東京でのことばの使い方が、周辺の関東・甲信越にも広まったのでしょう」

上記の逸話をまとめていうと、関東や甲信越地方では「はす」で地下茎の「れんこん」を指し示すことも可能だということである。『食道楽続編春の巻』の著者である村井は、豊橋生まれであり、11 歳でロシア語を学び始め、東京外国語学校（現在の東京外国語大学）に入学したが、それ以降の主要な活動地域が、途中数年間の放浪や渡米を除き、ほとんど関東圏だった。このような生活歴からみると、村井には「はす」でも「れんこん」を表し得るという認識をもった可能性が高いようである。その結果、自作小説における食材用の「蓮根」のルビに「はす」と振ったり「れんこん」と振ったりしたということになったのではないだろうか。ただし、このような言葉遣いの習慣が果たして明治期の関東・甲信越地域に共通したことかどうかは、更なる調査が必要だろうが、今後の研究に譲る。

ところで、（11）と（12）における「サラダ油」の「油」に振られるルビはそれぞれ「あぶら」と「ゆ」である。「ゆ」は「油」の音読みで、「あぶら」はその訓読みである。二文の文脈からわかるように、読み方のいかんに関わらず、2 語ともにサラダオイルを指していることになるため、ルビの相違と語意上の対応が特にないと考えている。

前にも述べたように、明治時期においては、日本語の統一的な表記基準がまだ確立されなかったため、漢字の字体にも、ルビの振り方にも、それなりのゆれが避けられない場合があった。まして「外来語＋漢語」という当時にしてかなり斬新な語構成となると、なおさらだったということが想像するにかたくない。（11）と（12）の「サラダ油」にみられるルビの単純なゆれがまさにその好例だといえよう。

５.明治期の同物多表記の言語特徴

前のところでも言及したが、明治時代では、統一的な言語規範がまだ打ち立てられなかったため、字体や仮名の表記においてときに不安定な一面があった。このほかに、同一物でありながら、多様な文字表記や語彙でそれに対応、記述したことも、『食道楽続編　春の巻』の調査でわかってきた。以下の例示を通して、そういう表現の特徴に触れたい。

（13）薩摩芋南瓜ジヤガ芋の様なものにはバターと牛乳とかクリームとか云ふものがよく合つて好い味を出します（p.297）

（14）即ちアスペラガス（西洋獨活）やブロツコリ（木立花ヤサイ）やスクオシ（南瓜）やソルレル（スカンボ）…が澤山出て来ますから（p.324）

（15）馬鈴薯の疫病（p.124）

（16）一旦ゆでたジヤガ芋を刻んで此の梅干で和へてもよし（p.146）

（17）メンチポテト（索引 p.15）

（18）ポテツトミート（索引 p.14）

（13）と（14）に示されているように、「南瓜」という日本料理におなじみの食材に対して、『食道楽続編　春の巻』には、それぞれ「とうなす」、「スクオシ」、「かぼちゃ」という３つの言い方と、漢語、外来語という２類の語種で表示された。

「かぼちゃ」（カボチャ）の語源について、『明鏡国語辞典　携帯版』(前掲）には「16 世紀にポルトガル船によってカンボジア（Cambodia)から渡来したことから」（ｐ.332）だと記載されている。また、その別名としては「ボウフラ」[6]「トウナス」「ナンキン」があげられている。

[6] 「ボウブラ」が普通の表記だろうと思われる。

これらの呼び名及び漢字の「南瓜」の語源について、更にウェブサイトの語源由来辞典[7]を調べたところ、下記の記述が見つかった。

> 「漢字の「南瓜」は南蛮渡来の瓜の意味で、中国でも「南瓜(ナングァ)」と呼ばれる。かぼちゃの異名には「南京(ナンキン)」、「ボウブラ」、「唐茄子(トウナス)」がある。南京は日本にもたらされる寄港地である中国の「南京」に由来し、ボウブラはウリ科の植物を意味するポルトガル語「abobora」に由来、唐茄子は唐の国から渡来した茄子という意味からである。」

上記の解説から考えてみれば、「かぼちゃ」の名と、その当字の「南瓜」及び異名は、恐らく明治時代以前にすでに日本語に移入されただろう。これに対して、（14）に出ている「スクオシ」という言い方だけが、明治以降に北米より輸入されたようである[8]。ただし、「スクオシ」がウェブ上にも見つからず、その発音に近い「スコッシュ」（squash＝かぼちゃ、西洋かぼちゃ）というのがあった。「西洋かぼちゃ」が日本に渡った際に、「squash」という英語の原音は日本語化し、カタカナで表記されることによって「スクオシ」か「スコッシュ」になったと推測される。西洋語を日本語化する過程において、音訳という手段が一般的だが、原音とずれた変容が若干ながら起きたと考えられる。

現代日本語では、「スクオシ」以外に、「かぼちゃ」という呼び名とその別名がまだそれぞれ見聞きされているようだが、少し違うのは、現代日本語には、明治期にみたそのルビ表記や同一文章における各言い方の混用ということはない、というところであろう。

続いて、（15）～（18）の「ジャガイモ」をみてみよう。用例を眺めてみると、『食道楽続編　春の巻』においては、「ジャガイモ」を指すのに「馬鈴薯」、「じやがいも」、「ジヤガ芋」、「ポテト」、「ポテツト」という５つの文字表現があった。ウェブサイトの語源由来辞典（前掲）で「ジャガイモ」を調べてみると、次のことがわかる。

7　次のサイト参照：https://gogen-yurai.jp/kabocha/

8　次のサイト参照：https://ja.wikipedia.org/wiki/カボチャ

ジャガイモは、「ジャガタラ芋(ジャガタラいも)」の略。ジャガタラとは、インドネシアの首都「ジャカルタ」のことで、16 世紀末頃、オランダ商船によりジャカルタから渡来したためこの名がある。馬鈴薯。ジャガいも。

ここからは、「ジャガイモ」の全称名が 16 世紀にも日本語に入った、ことがわかった。そして、「馬鈴薯」も「ジャガいも」も明治以前に使用されていた（峪口ら 2013 参照）。これらに対して、「ポテト」と、「ポテツト」は、文字どおり英語原音の「potato」を外来語化したもので、明治以降の言い方である。『食道楽続編　春の巻』における「ジャガイモ」の各表記は、「ポテト」に統合された「ポテツト」を除き、現在でもそれぞれ用いられている[9]が、明治期常用のルビ表現や同一文章中の用語混用などは見られない。

このように、『食道楽続編　春の巻』のような明治時代の文章において、和語と洋語、既有語と新語などの併用が不思議なことではなかったように思われる。

６．おわりに

本稿は、『食道楽続編　春の巻』という特色のある大衆小説をもとに、明治期の日本語の語彙・文字の表現特徴について考察を行った。その結果を一言でいうと、近代化の端緒となった明治時代において、新旧、内外、和洋など諸々の事情の変化と物事の交替に伴って、日本語の文字・語彙表現にも、外来語や新造語込みの総ルビ表記、同語異表記、同物多表記といったバリエーションが生じており、しかもまったく同一の文章において生起していた、ということが本稿の調査で明らかになった。

しかし、物足りないところがある。本稿では、明治期の文字・語彙の表現特徴への考察がメインであったため、語源の追及や要因の分析などがあくまで一般論にとどまっている。百数十年前の言語資料の研究や考証にあたり、一層の労力と時間が必要であるが、今後の重大な課題とする。

9　例えば、学会によっては、「バレイショ」＝日本育種学会、日本作物学会、日本植物防疫協会；「ジャガイモ」＝園芸学会、日本植物学会、日本土壌微生物学会、と呼び名が異なる（https://ja.wikipedia.org/wiki/ジャガイモを参照）。

参考資料

https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/886113（国立国会図書館デジタル　コレクション）
http://www.muraigensai.com/gensaimaturi/gensai.html
https://ja.wikipedia.org/wiki/食道楽_(村井弦斎)
https://ja.wikipedia.org/wiki/村井弦斎
https://gogen-yurai.jp/kabocha/
https://ja.wikipedia.org/wiki/カボチャ
https://ja.wikipedia.org/wiki/ジャガイモ
『広辞林（第六版）』三省堂編修所編、三省堂、1983。
『明鏡国語辞典　携帯版』北原保雄編、大修館書店、2003。

参考文献

今仲昌宏（2021）「明治期における日本語の言語適応再考（2）」『東京成徳大学研究紀要ー人文学部・国際学部・応用心理学部ー』第 28 号,55-72
黒岩比佐子（2004）『「食道楽」の人 村井弦斎』岩波書店
今野真二（2012）『百年前の日本語――書きことばが揺れた時代（岩波新書）』岩波書店
峪口有香子、岸江信介（2013）淡路島の方言語彙に関する研究−じゃがいも・さつまいも・さといも−」『言語文化研究』21,121-139
塩田雄大（2005）「最近気になる放送用語　「はす？れんこん？」NHK 放送文化研究所：
https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/kotoba/term/096.html,2022-8-5 アクセス
立山千草（2020）「ハスの来歴と部位別の特性」『新潟の生活文化』26 号,9-12
飛田良文（1973）『国立国語研究所の歩み・6　明治時代の言語』国立国語研究所,81-96
間淵洋子（2016）「近代二字漢語における同語異表記の実態と変化ー形態論情報付きコーパスを用いてー」『計量国語学』30 巻 5 号,257-274